

ばらんす

第34号

編集発行

大田原市総合政策部
政策推進課 市民協働係
〒324-8641
大田原市本町1丁目4番1号
☎ 0287-23-8701
FAX 0287-23-8748

大田原市民の海外研修報告会

～幸福度世界一、童話の故郷「デンマーク」に派遣～

1月26日、市総合文化会館で「大田原市民の海外研修報告会」が開催された。

この海外研修は、今年度の新たな施策として、男女を問わず大田原市民を対象に実施された事業である。昨年度まで女性リーダーを育成する目的で10年間、南フランスのカヴァイオン市を中心に、延べ100名の女性を派遣した「女性の海外研修」の成果を受けた施策である。派遣先は「高齢者福祉」「学校教育」などの先進国、世界一の幸福度、アンデルセン童話の

故郷デンマーク。小論文審査を提出し応募した20代から60代の男女(男性2名、女性6名)が、昨年10月10日から8日間の研修に参加した。当初、大半が初対面で年代、キャリアが異なる男女混雑で上手くいくかと心配をされた。しかし、派遣チームは、7月から約3か月間「男女共同参画」「高齢者福祉」「学校教育」などの事前学習を行い、訪問先の地理・歴史・文化や簡単な言葉なども共に研さんした。親善交流の準備にケン玉、折紙、日本の歌の練習なども行った。

チームは様々な事前準備を通しお互いがそれぞれ個性を発揮し、男女、年齢などの違いを乗り越え、素晴らしい仲間となった。

「メンバーは一つの家族のようでした。落ち着いた雰囲気のお父さん、安心できるお母さん、看護師・薬剤師・通訳と頼りになるお姉さん達。それにイケメンの弟とかえがたい人たちに恵まれました」

副団長の菅谷知似子さんが笑顔で語られる素晴らしいチームとなった。チーム名はデンマーク語でサマアバ(協働)と名付けられた。主な視察は、首都コペンハ

ーゲン近郊のネストヴェエ市。到着の翌日、コペンハーゲンの世界遺産を見学し、次の日はネストヴェエ市長から温かい笑顔の歓迎を受けた。団長の笠原秀夫さんが英語で挨拶をし、友好の土産にと準備した藍染の壁掛を手渡した。「二番年長で団長を仰せつかり、貴重な体験でした。つたないジャパニーズ英語が通じ、包装の和紙にまで興味を示された……。皆さんの笑顔の対応に心が通じた喜びを感じました」と、その時の感想を述べられた。

市庁舎の訪問を終え市内の6歳から16歳まで小中一貫教育の国民学校を視察した。そこでは「学びの意欲を育てる」という基本方針にのっとり、教師と子どもたちが共に自由で伸び伸びとしていく感じを受けた。

次に旧兵舎を改築した高齢者施設を訪問した。宗教的な影響からか親との同居率が6%と低いデンマークは、次の三原則に基づき高齢者施設が行われていた。

- ①自己決定
- ②生活の継続性
- ③自己能力の活用

ゆりかごから墓場までのデンマークも高齢化により財政難で、ケア付き共同住宅の充実へと改革が図られている。



笠原 秀夫 団長

翌日は宿泊し、交流会を行った他、ファームペンションのジャージー乳牛の牧場を見学した。牛がみずからブラシ掛けをしていたという……。交流会ではケン玉、折紙を教え「ふるさと」を一緒に歌い、友好を深めることが出来た。その他、多くの体験を通し心に溢れる宝を詰め帰国した。



牛のブラシ掛け!

絵画に情熱を

燃やし続ける！

増山トシさんは、創元会(全国的な画家集団)の正会員である。80歳を過ぎた今も絵への情熱を燃やし続け、絵筆を握る日々である。食事を忘れ、ひたすらキャンパスに向かうこともある。

「絵筆を取ると無心になれる。雑念が消えて没頭する」

そう語る増山さんは、童女のような温容を見せてくれた。

絵への思いは、どうして生まれたのだろうか。それは戦前女学生だったとき、図画の教師がいつも作品を校長室に飾ってくれた……、そうしたことが絵の道へと入るきっかけになったとのことだ。

画歴は約50年以上となる。最初は色紙に水彩であったが、その後油絵となった。その間指導を受けたのは、萩原省三氏・秋元和雄氏そして武蔵野美術大学の通信教育を受講したこともあった。

現在は、来春東京新国立美術館で開催される展覧会に出展する作品(テーマ里山の春100号)



増山 トシさん

を制作中である。

一年間には、地域を中心に文化祭や作家展に出展している。10号から100号という大作まで飽くことなく意欲を持って努力を重ねている。

以前に、林野庁主催の美術展に那須街道沿いの松木立を出し、知事賞となったこともあった。市銘木めぐりに参加し、大木を見る機会を得て、風雪に耐え脈々と生き続ける木の生命力に強く心を打たれた。そうしたことから大木を描くようになったそうだ。

那須温泉神社の茂みで大木を見つけて描き、テーマは「生きる」とつけた。樹齢800年のミズナラはその後、ご神木となり注連縄が巻かれ、参拝者の信仰を集めた。絵は那須神社に奉納し社殿に飾られている。また、ロシア・ハバロフスクのアムール河畔で白樺の群生を描いたこともあるという。

絵画を続けている陰には、増山さんの強い意志と行動力がある。

ご夫婦で旧金田村に医院を開業(昭和26年)。その頃地区は無医村であった。医療事務を担当し子育て、また市議として活躍されたご主人を支え続けた。その間にも絵筆を持つことを忘れなかった。

絵画の他、家庭裁判所の調停委員として34年間勤め、平成10年藍綬褒章を授与された。また国際ソロプチミスト那須会員となって29年になる。来年は30周年を迎えるため準備にも当たっている。

一日一日を自分らしく生きていく姿、その力は何処からかとうとう、戦中戦後を生き抜いてきたことと言われた。

「いまやらねばいつ出来るわしがやらねばだれがする」この言葉が心の中にあるそうだ。



第66回創元展

「待春」

男女共同参画講座 ~あなたらしく~



第3回

10月3日(水)、黒羽・川西地区公民館において第3回講座が開催された。日本絵手紙協会公認講師の鈴木啓子氏による「自分のできることから」と題しての体験学習である。まず自己紹介から始まり、各自のアピールタイムの後にいよいよ絵手紙体験となった。新聞紙のカラー部分を利用してモザイク画のうちわを作成した。来年の自分へのメッセージを添え、消しゴム製の朱印を押して完成。新しい自分に出会うひと時となった。

第4回

11月17日(土)、与一伝承館多目的ホールにおいて、男女共同参画講座第4回が開催された。

講師は、東山雲巖寺住職原 宗明(はら そうみょう)老大師である。法衣姿で朱骨の扇を手になされ、爪革付きの履き物を召された姿は、清々しい雰囲気を出していた。受講生からの問題提起を受けて説かれたのは「明るい方へ光明に向かって生きる」ということであった。

人間の生きることについては、人間に生きる目的とは、真理を尊び人の役に立つことである。目的は自分で見つけるべきものであって人に言われるものではない。人生は目的を探す事業であり死ぬまで真理を探す旅であると、説かれた。人権とは相手を認める作業である。いじめは相手を否定する作業である。弱いものをいじめるのは卑怯者だ。卑しく怯える者だということ人間にらしめる。嘲る(あざける)・鬪る(なぶる)・いじめるは、自分の弱点を他人に転嫁することだ。



子どもへの教えとして次の様な内容をあげられた。

- ①人に迷惑をかける者になってはいけない!
- ②自分が人にされて嫌なことは他人にしない!
- ③人にしてやって喜ばれることをする!

今日を100%生きつくす老大師。高い人格と品性を感じ、人間の生き方のモデルを仰ぐ思いであった。

30周年を迎える 音訳ボランティアグループ

今年度30周年を迎える「まつぼ
つくり」(小磯伸子会長)は、会員
23名で、視覚障がい者へ音訳ボラ
ンティアをされています。

取材に伺うと、30周年の記念誌
等の話合いが行われていました。
「記念文集ぐらいでいいのでは」
「私たちは声のボランティアをし
ているのだから、ひとりひとりの
声を残したら」など活発な意見交
換の中では、会員の方がそれぞれ
信念をもって活動されている様
子が伺えました。

活動目標は「利用者の心に響く
音訳を心がけよう」「笑顔あふれ
るまつぼつくりで行動しよう」と
のこと。活動内容は、主に毎月1
回の「定期便」(1
20分)で、お楽
しみ文庫と情報
の広場の2本立
てになっていま
す。お楽しみ文庫
は、担当者が選ん
だ小説などを音
訳し、情報の広場
は、季節のことや



新しいお店の情報、ニュースなど
担当者の感性で様々です。

音訳は現在、パソコンでデジ
ー図書(CD)に編集して配布さ
れます。利用者の方(現在14名)は
専用の再生機(プレクストーク)
を使って聴くことになりました。機
械を持たない方には今までどお
りテープで配布しています。その
他、個人的に希望する本の音訳、
サポートハウス那須での対面朗
読、研修会、交流会、など範囲は多
岐にわたっています。また、平成
24年4月からは広報おたわら
議会だより、社協だより等を音訳
する作業が加まりました。

音訳はモニターをし、間違
い箇所を修正してCDにしま
す。著作権等の問題があるの
で、一言1句間違えられない
プレッシャーがあるそうです
が、利用者から「楽しみにして
います」「ありがとうございます
です」と感謝され
ると「喜んでもらえ
てよかったですや
りがいを感じるの
こと。

作業は4班のグ
ループ編成で、当番
の会員は、それぞれ
自宅で作業をして



音訳利用者との交流会

データを持ち寄ってまとめてC
Dにします。また、個人的に希望
する本の音訳で長い本になると
2ヶ月〜半年、また52巻もので2
年かかった事もありました。
最後に会員の皆さんにお話を
伺いました。「地味で、孤独な作業
だが、達成感がある」「月に1度集
まって話し合い共感しあって、す
ばらしい仲間と出会えた」「普段
読まない本に出合えたり新しい
発見につながる」と嬉しそうに話
されました。
皆様の活動は、障がい者に優し
く、「この町にすんでよかった」と
住みやすい大田原の一助を担っ
ておられる活動だと思いました。
今後のご活躍を期待します。

《平成24年度 女性のための起業家支援講座》

～地域も社会もHappyに! 私らしい仕事のはじめ方～

10月21日(日)に開催された講座は「働くママが日本を救う!」子連れで出勤というユニークな働き方を提案された、授乳服のMo-House(モーハウス)代表取締役光畑由佳氏から、夢を実現した貴重な体験が紹介された。

「何処でも母乳が与えられる授乳服と出会ったときの《自由のパスポート》を得た感覚。この感動を子育てママに伝えたかった」と、起業の発端を熱く語られた。その初心の感動を大事に育て起業された。そして様々な壁を乗り越え、女性の新しい働き方を発信してこられた。また、変化が激しい現代、ソーシャルビジネスの種、チャンスはたくさんあると強調された。参加者の様々な質問にも丁寧に答えられ有意義な講座となった。この講座には、将来起業を目指す30代の女性10数名と若干の男性が参加した。



男女共同参画講演会

1月26日(土)、男女共同参画講演会が市総合文化会館で開催された。講師は元NHKエグゼクティブアナウンサーの村上信夫氏である。

テーマは「おやじの腕まくり」で、腕まくりしてもやりたいことは《言葉

を磨く》、《命の大切さ》、それらを地域で種蒔きをし、次世代に伝えること。

アナウンサーとしての豊富な体験が語られ、現代はゲーム・携帯にか

かわりがちだが、言葉によるコミュニケーションが大切だと強調された。大切な言葉が忘れ去られようとしている。

言葉の一つひとつを引き出しに入れ、必要なとき取り出し活用する。「おはよう」で心の窓が開き、「ありがとう」で感謝の気持ち、「いただきます」で多くの命をいただいて私の命がある…。言葉は発することによって意識が変わり気持ちが高まる。そして言葉は言ったように還ってくる。

話し方は間の取り方が大切で、一呼吸置いてゆっくり話す。聞き方は話してくれたことに対してひとまず肯定し、その後自分の考えを言う、肯定的な聞き方がよい。

命については「いのちのまつり」という絵本の読み聞かせを通して、自分の命はかけがえのない大切なもので、自分一人のものではなく先祖から続く命の繋がりであると教えられた。

言葉と人間のかかわりの大切さ、そして心を開く大切な言葉を次の世代に伝えていかなければならない。「生まれてきてくれて、生きていてくれてありがとう。その命を大切に次の世代に伝えていこう、嬉しい言葉の種を蒔きながら……」と、結ばれた。



育メン講座

～パパと一緒に！
たのしい料理づくりに挑戦～



12月2日(日)、市総合文化会館調理実習室にカラフルなバンダナを頭に巻いたエプロン姿の、若いパパと小学生が集った。今回の講座では、普段子どもたちとの交流が少ない若いパパたちが、チキンカレーピラフ、りんごとキャベツのレモンサラダとフルーツカップケーキづくりに挑戦した。

講師はクッキングスクール代表の渡辺恵津子先生。「料理には、国語・算数・理科の勉強が全て含まれているんですよ……」と、手順を示しながら大事なポイントを興味深く伝えられた。

子どもたちは目を輝かせ、パパたちはメモを取りながらフムフムと頷いていた。買ってもらった可愛いマイ包丁とまな板を手に取りパパを見上げる瞳、見事な包丁さばきの我が子に感心するパパ……。

大事な食育を通し、子どもたちと育メン・パパの楽しい交流ができた講座だった。



編集委員募集!!

一緒に「ばらんす」をつくりませんか?

「ばらんす」(11月、3月発行)の編集ボランティアを募集しています。年齢・性別は問いません。

大田原市総合政策部政策推進課
市民協働係 TEL.0287-23-8701

★取り上げて欲しい情報がありましたらお寄せ下さい。

編集後記

男女混合チームの海外研修報告が行われた。一つの家族のようにお互いが補い合い、それぞれの役割に合った報告会は、微笑ましく聴く人の心にふわっとした風が流れた……。

「ばらんす」も、さらに男女が尊敬しあう社会を願い、歩みを進めたい……。

(谷 辺)

編集委員

(五十音順)

- ◆栗原 敏子
- ◆谷辺 範夫
- ◆野田 芳江
- ◆藤沼 久子